

◆ 今週のコメント

- ・ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の定点当たり報告数は1.28(51例)で、本年度で最も多くなっています。全国の定点当たり報告数についても、2.33と、前週の1.94から増加しています。本市における報告を行政区別にみると、上京区、左京区、山科区、下京区、南区、右京区、伏見区、西京区の8行政区で、前週から増加しています。
- ・ 感染性胃腸炎の定点当たり報告数は9.48(379例)で、前週に引き続き、本年度で最も多い報告数となっています。

◆ 今週のトピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は、5.37(360例)で、2週連続で増加しています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 二類:結核 10例(肺結核 6例, 肺外結核 2例, 潜在性結核感染者 2例), (喀痰塗抹陽性 5例)
【1月以降の累積報告数 114例(肺結核 57例, 肺外結核 26例, 潜在性結核感染者 31例), (喀痰塗抹陽性 34例)】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点67, 小児科定点40, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ ^a	インフルエンザ	5.37	360
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	9.48	379
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.28	51
	③ 水痘	0.85	34
	④ 突発性発しん	0.35	14
	④ 流行性耳下腺炎	0.35	14
眼科	流行性角結膜炎	0.50	5

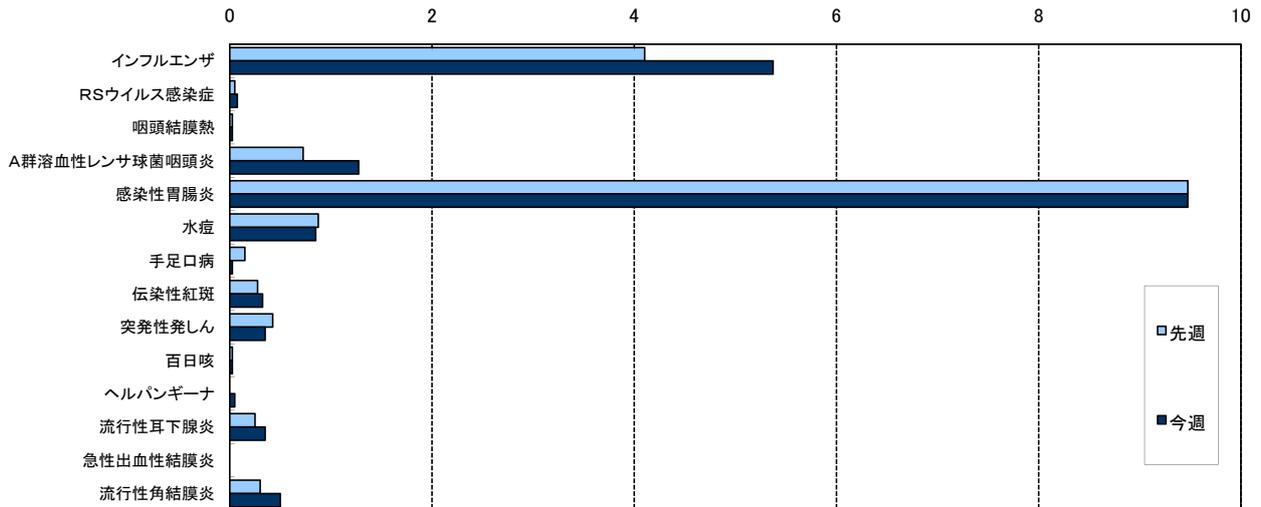
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <インフルエンザ>

(注) 京都市のデータは、平成23年5月2日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

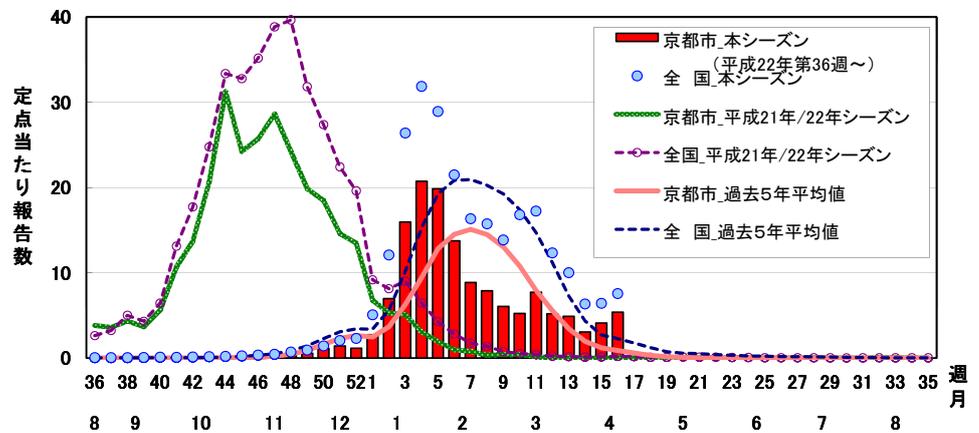
◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第16週)と先週(第15週)の定点当たり報告数の比較



2 インフルエンザの推移

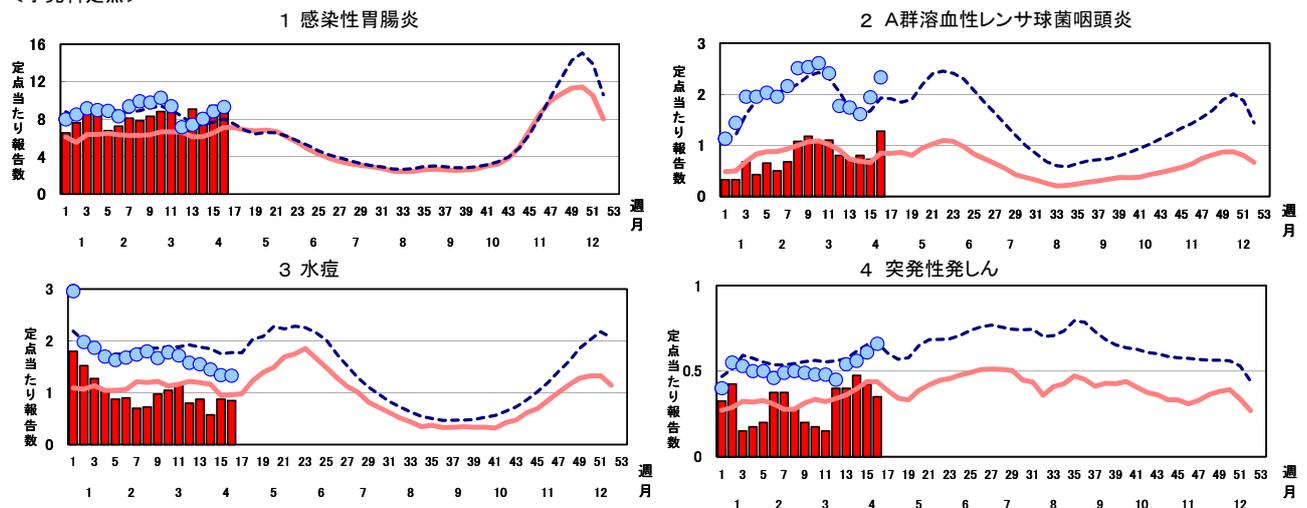
週	報告数(例)
第12週	348
第13週	327
第14週	205
第15週	275
第16週	360
累積報告数 (第36週以降)	9,647



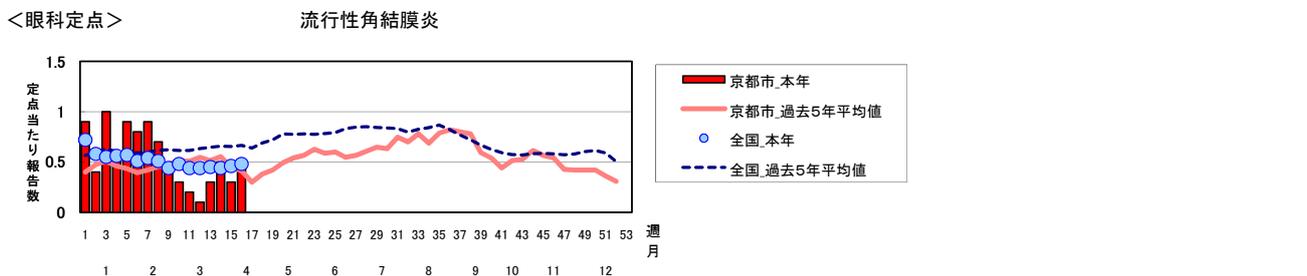
※平成21年/22年シーズンは、新型インフルエンザの発生により、例年と流行傾向が大きく異なるため、別に表記しています。

3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



第16週(4月18日～4月24日)トピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は、5.37(360例)で、2週連続で増加しています。

この動向は、全国及び近畿6府県でも同様にみられます。

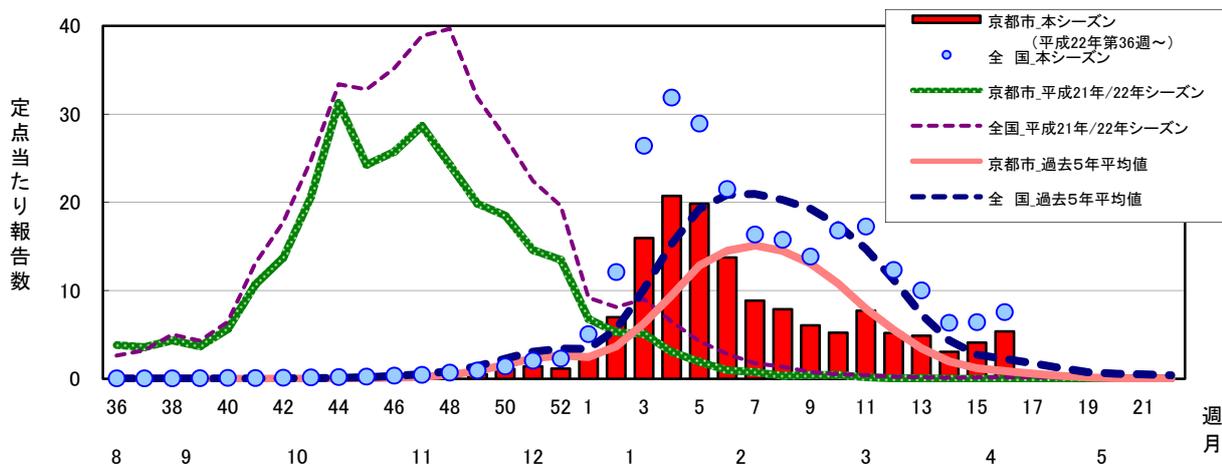
第12週から第14週にかけての定点当たり報告数の減少は、この期間が「春休み」に当たることから、「人の移動の変化」によるものとも考えられ、今後のインフルエンザの発生動向には、まだまだ注意が必要といえます。

また、全国のインフルエンザウイルスの検出割合では、B型の占める割合が急増し、冬期とは違う型による、インフルエンザの流行が懸念されます。

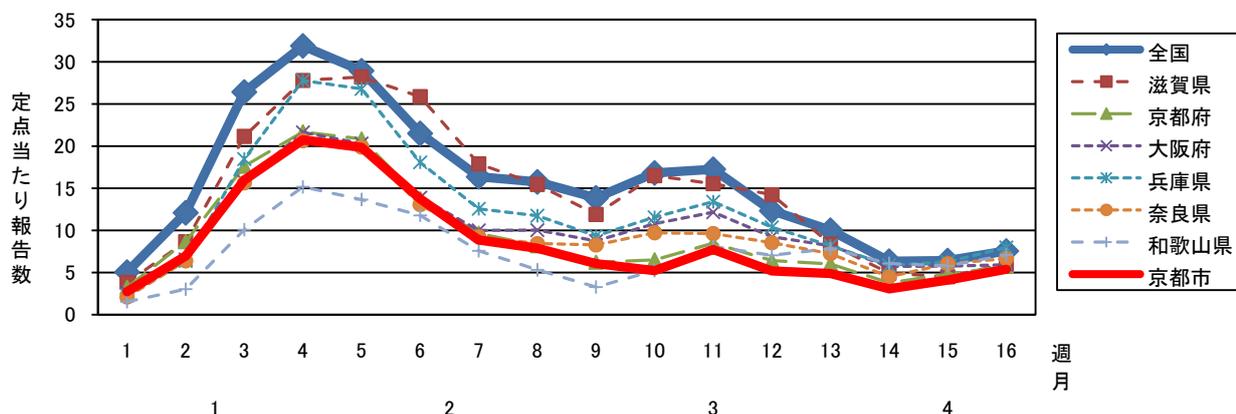
なお、今般の新型インフルエンザ(A/H1N1)については、平成23年4月1日以降、名称を「インフルエンザ(H1N1)2009」とし、季節性インフルエンザとして取扱うことが、厚生労働省から発表されています。

詳細はこちら→ <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000179p0.html>

本市及び全国の定点当たり報告数の推移



全国、近畿6府県及び京都市の定点当たり報告数の推移(平成23年)



全国のインフルエンザウイルス検出割合(5月2日現在:「病原微生物検出情報」から)

